

要旨

信頼が信頼性を引き出すのか否かは、社会科学において重要な問いである。しかしながら、先行研究の結果は一貫していない。本研究では、信頼性を個人の性質としてではなく、状況により変化するものとして扱うことで、この問いを検討した。本実験は2要因6水準の実験デザインであった。預け手の意思の有無を被験者間で2条件（意思条件・くじ条件）設定し、分け手が預け手から信頼された程度を被験者内で3水準（低預託・中預託・高預託）設定した。実験の結果、分け手から預け手への返還率は、意思条件でのみ、中預託時と高預託時で高くなった。くじ条件では、分け手が信頼された程度は返還率に影響を与えなかった。これらの結果から、預け手が意思を持って分け手を信頼したときのみ、信頼は信頼性を引き出すことが明らかになった。考察では、今まで考えられてきた以上に、信頼行動が適応的な行動である可能性について議論した。